

家族のための ファミリープレイタイム

男女共同参画がすすむなかで、父親の子育て参加や親子への子育て支援活動が広まってきたころから、子どもと積極的に遊ぶ親の姿が目立つようになってきました。「ファミリープレイタイム」は、子どもだけが楽しむのではなく、また大人が子どものためにするものでもなく、親子と一緒に体験し、遊ぶことの楽しさを見つけるプログラムです。

親子で一緒に楽しむ 遊びのワークショップ

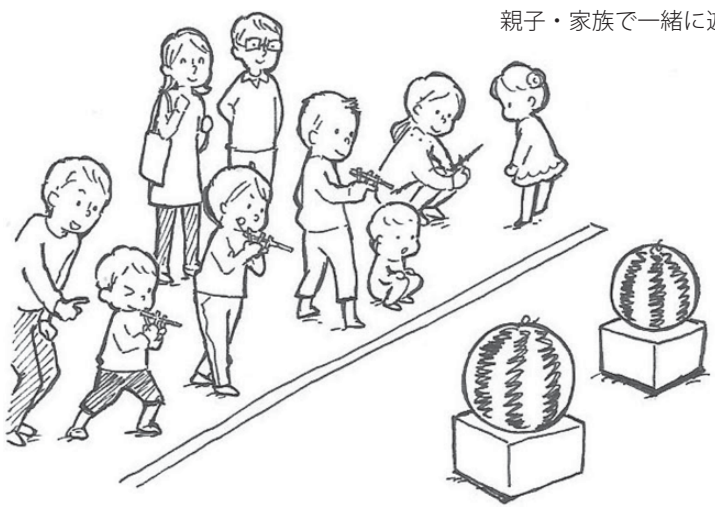
遊ぶのは子ども。親は付き添いで、遊んでいるのを見守る——ひと昔、ふた昔前の〔こどもの城〕の姿です。今は、「子どもと一緒に楽しみたい」と、積極的に子どもと遊ぶ親の姿が増えてきました。家族のための遊びのワークショップ「ファミリープレイタイム」に参加した保護者からは、「子どもと一緒に楽しい時間が過ごせた」「子どもの成長を感じた」という声が寄せられます。

家族が一緒になって遊ぶ活動は、プログラムを楽しむだけではなく、親子・家族を見つめ直す機会にもなっています。一緒に活動している、ほかの親子から受ける影響も少なくありません。心から楽しんでいる子どもの笑顔が、親の子育てへの意欲を高めるものになっているようです。

●保護者が子どもと一緒に楽しめる場面を作る

「ファミリープレイタイム」では、さまざまなプログラムを取り上げています。親子・家族で一緒に遊ぶことを目的としたプログラムなので、取り上げるプログラムは多彩です。大きく、ゲーム系のプログラムと工作系のプログラムに分けられます。いずれの場合も、保護者が子どもと一緒に楽しめる場面を作っています。

ゲーム系のプログラムは、開催時間内ならいつでも参加できるものが多く、工作系のプログラムは、時間を決めて一斉に始める“教室”ふうのものが多くなります。いずれの場合も、参加する家族（親、子ども）が、プログラムのなかでそれぞれの“役割・居場所”があるように構成して、“子どもと一緒に取り組む”活動にしています。



●『親子でチャレンジゲーム』 ゲームする人と記録する人を交代に

開催時間中なら、いつでも参加できるプログラムです。課題のゲームにチャレンジして好記録をめざします。

受付で、親子それぞれに記録用のカードをわたし、自分たちで記録してもらいます。参加者の自己申告です。遊び方は、それぞれのコーナーにはりだしておきます。小さな子どもには、親から説明してもらいます。親の役割のひとつです。

ゲームでは、時間を計測したり、回数を数えたり、親子で役割を交代しながら遊びます。それぞれが役割を果たすことで、一体感も生まれてきます。

運営するスタッフがたくさんいる場合は、各ゲームのコーナーに審判役や応援団をおいて、親子の取り組みを盛り上げます。好記録がでたら壁にはりだして、競争意欲を高める方法もあります。

取り上げるゲームにも配慮が必要です。運動能力・体力などの差が強く影響するものは、避けるようにしています。体力に自信がない人に敬遠されてしまうからです。偶然性が高いもの、じっくり取り組めばだれにでもできるものなど、大人と子どもの差が出にくいもの、参加者の能力に直接結びつかないものを選びます。同時に、いろいろな傾向のものを組み合わせるようにしています。

□ぼうずめくり □百人一首を使ったゲームです。“ぼうず札”を引かずに、何枚めくれるかを競います。性別や年齢に関係なく楽しめます。

□かんづみ □飲料用の空き缶（重さがあるスチール缶がのぞま



イラスト：いがき けいこ

しい)を何段積み上げられるかを競います。時間制にすると、大人と子どもの差が出てきますが、缶がくずれるまでにするとその差は少なくなります。

□小豆うつし □はしまたはスプーンで、小豆を一粒ずつ器に移します。時間制です。はしにすると大人が有利になります。大人ははし、子どもはスプーンにすると、子どもが少し有利になるかもしれません。

□あ音発声 □一息で「あー」と長く声を出しつづけ、時間を計測します。大人が有利になるので、大人は20秒、子どもは10秒で1ポイントというようにすれば、対等になります。

□ニア・ザ・ライン □端からボールを転がし、基準線にどれだけ近づけられるかを競います。壁に当たった跳ね返りも利用できます。基準線からの距離を計測します。

●『親子 100 問ラリー』

館内各所に100問分のクイズをはります。問題用紙を探しながら、3択の問題に答えます。受付（スタート）で、解答用紙と鉛筆をわたし、ゴール（受付）で答え合わせをしてもらいます。親世代なら分かる問題、子どもにもわかる問題をまぜておくと、自然に親子で相談するようになります。

●保護者の参加で活動内容が広がる 工作系のプログラム

「ファミリープレイタイム」は、子どもと保護者を対象としたプログラムです。保護者が一緒に参加することで、子どもだけでは難しいと思われるプログラムも行うことができます。

火を使うもの、包丁やのこぎりなどの道具を使うもの、子どもには扱いきらい大きなものを作るもの——プログラム作りの可能性が広がっていきます。大工道具を使うような工作プログラムには、多くの父親が参加します。

工作系のプログラムは、一定の手順をふんで工作することになります。実施形態としては、開始時間や定員を決めた“教室形式”をとることが多くなります。手順が少なければ、開催時間内は自由に参加できる形態も可能です。

●『穴あきキャンドル』 ～溶かしたろうの扱いに注意～

たくさんの穴があいた、キャンドルを作るプログラムです。湯せんして溶かしたろうに、クレヨンを削って粉にしたものを入れて、着色します。湯せんの場所を複数作っておくと、複数の色のろうを作ることができます。

型（小さな紙コップなど）に砕いた氷を入れ、ろうそくのじんになるたこ糸を入れます。たこ糸の一端は型の底につくようにし、一端は氷の上に顔を出すようにします。

氷の上から、溶けたろうを流し込みます。たこ糸のじんは、流し込んだろうの上まで伸ばし、割ばしにはさんでコップの上にわたして、固まったときにろうから顔を出すようにします。完全に固まったら、型から取り出し、完成です。ろうが固まるにつれて、氷も溶けます。ときには、水が閉じ込められてしまうこともあります。穴をあけて、水を取り除きます。

溶けた氷の跡が空洞になり、思いもよらない形のキャンドルができあがります。氷が大きいと、穴が大きくなって強度不足で崩れてしまうことがあります。小指の先きぐらいの大きさが適当です。

火を使って湯せんする、溶けたろうを扱う——やけどなどの危険があるので、一緒に参加している保護者に、安全面での配慮をしてもらいます。プログラムの説明にあわせて、お願いしておきます。



□子どもや親がそれぞれに活動できる場面を作る□

「ファミリープレイタイム」では、プログラム内容、参加対象、参加形態、受け付け方法など試行錯誤を続けてきました。

幼児や低学年の親子を対象に企画したプログラムを見て、参加を希望する高学年の子どももいます。“親子参加”を条件に、参加してもらったところ、年齢に見合った取り組みがみられ、家族で楽しんでいる姿がありました。幼児も、その姿を見て、興味や関心を持ち、参加意欲を刺激されたようです。

プログラムのなかで、参加している子どもや親が、それぞれに活躍できる場所や役割を作ることがポイントです。よりよいプログラムをめざして、試行錯誤を続けています。

□大人の力をうまく使う□

「うどん打ち」では、最初の段階では子どもが中心になって小麦粉をこねますが、仕上げは大人の力が必要です。子どもの動きを大人がフォローすることで、楽しいプログラムになっていきます。

「うどん打ち」では、家族と家族がふれあえるように、打ち終わったうどんをゆでるのは、数家族ごと一緒にしました。めんのお太や長さはいろいろですが、ひとつのなべでゆでることで一体感が生まれます。「あの太いのは、私のだ」「この短いのは、うちのかな？」など、会話が自然にはずみずみ。

そして、試食。手作りのうどんに満足そうです。家族単位の「うどん打ち」が、家族と家族のふれあいへと広がっていきます。



●『三つ馬を作って遊ぼう』 ～大工道具を使って、角材を加工～

「三つ馬」は、3本の角材を三角形に組んで、竹馬のように、バランスをとりながら、乗って遊ぶ遊具です。構造はシンプルですが、人が乗ってもこわれないように、がんばりに作る必要があります。お父さんが、参加したくなるプログラムのひとつです。

最初に寸法をはかり、印をつけます。印にあわせて、のこぎりで角材を切ります。のこぎりを使う機会が少なくなった今、参加した親子にとって貴重な体験になります。

切り出した3本の角材を組んで、大きな三角形を作ります。角材は、長めのねじで固定していきます。固定ができれば、その上からシュロ縄でしばります。大人が乗っても、こわれぬものを作ります。

親子で“大工仕事”に挑戦し、協力して世界にただひとつの“マイ・三つ馬”を作り上げます。

できあがったら、さっそく三つ馬で遊びます。バランスが要求される遊びなので、こつをつかむまで練習が必要です。保護者が子どもを支えながら、歩く練習をします。慣れてきたら、手放しで乗る、くねくね曲がったコースを速く歩く、向かい合って押し相撲をする——などの遊びにチャレンジします。

保護者も参加する親子プログラムなので、幼児や小学生低学年の子どもから参加できます。

●親と子ども、家族と家族がふれあう場

「子どもと一緒に楽しみたい。体験したい」「子どもと遊びを共有したい」「子どものころに遊んでいた遊びを見せたい。教えたい」——参加する保護者は、いろいろな思いを持っています。この思いを汲み取って、「一緒にどうぞ」「お手伝いをお願いします」と、積極的な参加をうながします。保護者を“傍観者”にしないことが、大きなポイントになります。

親子が対等な立場で、遊びに参加している姿はほほ笑ましいものですが、「ここは大人の出番」「子どもが頑張るのを見守るところ」というように、親子遊びのこつをさりげなく伝えるようにしています。

〈あそび〉のなかで伝えていくものは、人とかかわりやマナーを含めた、広い意味での“文化”だと考えています。「ファミリープレイタイム」で一緒に活動するなかで、同じ年ごろの他の子どもや親子の様子をみることで、自分の家族のあり方や子どもの成長に気づくことがあります。

親子のふれあいをすすめる場であると同時に、家族と家族のふれあいの場になるようにしています。